◇講　演◇

現代の子どもの意志・情性の病態

和田重正

大変遅くなりまして申しわけございませんでした。高速道路の上で一時間以上も動けなくなって、あんまりイライラしたものですから、何を話そうと思っていたかもう忘れてしまいまして、これから、ぼつぼつ思い出しながら話させていただきたいと思います。

実は今ここへ入って来て、その演題を見まして、ちょっと驚いているところなんです。この題についてはあまりよく知りませんでした。二、三日前に周郷先生からお電話がありましたけれども、要するにやる気と感情といったようなことだというような話だったものですから、私も、じゃあまあその気でやりましょうと思ってまいりました。

もう一つ最初におことわりしとかなきゃならないのは、私は学問ということを何もやったことがない者だということです。皆さんはおそらく、幼児心理だとか、教育学だとかいろいろむずかしい学問をなさっていらっしゃるだろうと思いますけれども、私はそういうことにまったく無縁でして、ただ自分の気のおもむくままに、主に中学生を相手にして四十年間、寺子屋という、はなはだ現代離れしたことをやってまいりました。その寺子屋というのは、学問をするところでもないし、また、特別なこれといった修行をするところでもなくて、ただ私は、自分自身、人間ていうのはどういうふうに生きるのが本当なんだろうか、あるいは、自分というものはいったいどんなものなんだろうか、ということ、そればっかり考えて、とうとう一生を過ごしてしまった。そして時に、若い人たちが寄ってくると、自分はこう思うんだ、こういうふうに生活してみたらこんなふうになったんだ、ということ、そういうことをお互いに話しあい

ながら、いつの間にか四十年過ぎてしまった。まあ、こういう経歴の人間なのです。

ところで先にも申しましたようにこの題をよく知りませんでしたので「やる気と感情」くらいのつもりで話させていただこうと思います。

欲望とは

近ごろ高校生なんかで、三無主義といって、無責任と無気力となんだかとか、無が三つつくという、そういうことがはやっているんだということをよく聞きます。その無気力というのは、やる気がないということですね。やる気がないというのは結局どういうことなんだろう。いや、それより前に、たとえば、やる気があってもあの赤軍派みたいなのは困ります。テルアビブとかいうところで、バリバリッとこう機関銃なんかぶっ放して人をいっぱい殺しちまう、というようなこと、あれもやる気があってやったんだろうと思うんです。ひとりでになんとなくやっちまったというんじゃないだろうと思うんです。だからやる気があってやるといったって、そういうふうにやられたんじゃ困る。何か建設的な、あるいは生産的な、そういうようなこと、いわばいいことをやる気になってもらわなくては困るわけです。

何かをやろうという意欲が出るのは、まずそれにふさわしい感情の興奮がなければならないと思うんです。ところが、その感情っていうのは、私は自分の経験から考えてみると、これは欲望と何か非常に深い関係がある、欲望に何か付随して出てくるもののような気がするんです。ですから、これは一面、欲望の問題じゃないのかなというようなことを思うんです。

欲望の問題として考えてみると、人間の欲望にはいろんな欲望があります。本能的な欲望、たとえば食欲とか、性欲とかという基本的な欲望があります。そういう種類の欲望から出発して、それをもっと確実に確保していくというか、つまりいつの場合にでも自由にそれをみたすことができるような状態を作りたくなってくる。物をためておきたい財欲とか、もっと発展していくというと、支配欲だとかいろいろな欲望がでてくると思うんです。そしてこの性欲とか食欲を基点として発達してくる欲望は、すべてその性質上物質的、官能的であるのは当然です。またそのことはこれらの欲望が本来エゴイスティックな傾向を強くもっているという意味にもなります。

集団の原点

ところが人間には、そういう欲望と少し系統の違う、愛他的な欲望といったような欲求があります。これは言葉としてまずいかもしれませんけれども、私の理解からするとやはり欲望の

一種だと思いますが、そういうものがどこから出てくるのか考えてみたいのです。

ちょっと話が横へ行きますけれども、生物の中には集団生活をするものがあります。生物がずっと昔から生存競争で生き残ってくるのには、何かしら生存競争に勝つ力を持っていなきゃならない。で、どんな力を持って生き残ってきているかということを見ると、個体として非常に闘争力とというか、行動力があるもの、ライオンだとかトラだとか、タカやワシみたいな猛きん類とか猛獣とかいうものが生き残ってきました。それからまた、雑草みたいに、あるいはミミズみたいに、ふんずけられても、切られても、それでも生きていくという、なんていうか、非常に生命力の旺盛なものがいる。ネズミなんかも、いろんな動物のえさになるのがまるで使命のようにできている。それで、どんどん食われても食われても、まださかえていくという、あれはその繁殖力でもって生きのびてきたんだということになると思うんです。もう一つは、アリだとかハチだとか馬というような、集団の力でもって生きていく動物がいる。

で、人間はいったい、そのうちのどれかというと、主として集団の力で生き残ってきた部類に属すると思います。

ところで、こういう集団の力で生きていく動物は、集団で生きていくのに都合のいいような本能を本来持っているわけです。それはどういうのかというと、結局自分勝手、めいめい勝手、ひとのことはなんでもかまわないというのではなくて、共感というか、ひとの気持ちと自分の気持ちが相通ずるような、そうしてみんなが外敵に対して共同の行動をとる、そういう能力なんですね。その能力が発展すると、お互い同志が、お互いの立場や気持ちがわかって、おもいやりとか、愛情とかいうようなものになってくる。そしてそれによって、いい集団ができる。人間の社会というものはそんなふうにしてだんだん発展してきたんだろうと思うんです。

ところが、人間は不思議なことに、他の動物と違って、知能というのが発達する。どっちが先だかよくわからないけれども、欲望と相ともなって知能は発達してきたんだろうと思うんですが。そういう知能が発達してくるに従って、かえってだんだんお互い同志、相通じあうという本能が弱められてきてしまっているのではないかと思います。お互いがお互いの気持ちを察しあう気持ちとか、あるいは深い愛情というようなものが乏しくなってきたように思うのです。どうしてそうなったのでしょう。そのような温かい豊かな心情のでてくるその元のところを、情性という言葉でいうらしいんですが、社会生活が複雑になってきた関係からか、その情性の発達が非常に妨げられているのだと思います。今日、われわれが中学生や高校生に接触していて

ですね、すごくつき合いにくくなってきているのを感ずるのです。人の真心が何のちゅうちょもなくけなされるばかりでなく、こっちがいおうとすることを心をとめて聞こうという気持ちが、大変少なくなってきているような気もするんです。それと同時に、物をじっくり味わうということもなくなっています。また暖かみというか、お互い同志が損得をこえて助け合い相むつみあって楽しくやっていくというふうなことが少なくなって、生活が浅はかになってきている、とまあこんなことを痛感するんです。

このごろの子どものやる気

そこで話をやる気に戻しますが、このごろの子どもたちの中にもやる気のあるものもかなりあります。しかし、どんなやる気があるのかというと、大体非常にエゴイスチックな、早くいえば、人をやっつけて自分が勝ってやろうというようなやる気です。そんなことにファイトを燃やす者はかなりあります。そのほかの者は何もする気がありません。われわれの所に来てもまったく何もする気がないっていうのがいっぱいいるわけです。何もやる気がないといっても、やっぱり肉体的に精力があふれてくるから何もしないでいられない。そこで強い刺激でもってその場その場をごまかしていこうということになっていきます。そういう青年がものすごく多くなっていますね。何もしないでぼやーっとしてテレビばかり見ているという子もたくさんいますけれど。それが、何か妙な方にやる気を起こしてしまう。オートバイをふっとばして、夜中にそこら辺を走り回る。この間テレビで、そういうグループを金沢から連れて来て、いろんなことを聞いているんです。ああいうことをなぜやるのかっていったら、おもしろいからだっていうだけなんです。それ以外は何も興味がないらしい。ああいうのはもう本当にやる気がなくて、それでやっとやる気を見いだしたっていうのが、ああいう猛烈な、自分も命をかける、それから人をけがさせる、夜中に気違いみたいな騒音をたてて安眠妨害をする、そんなことなんですね。建設的な方向に何の興味もなくなってしまっている。そういうのが本当にたくさんいるし、一般にもだいたい、みんながいく分かずつそういう傾向になってきている。

そういうやる気がなくなって、強い刺激だけを求めていくと、いわゆる非行少年になるのでしょう。この間おもしろいことを聞きましてね。非行少年なんかを預かる、何とか学院という、昔でいうと感化院なのかな。そういう所の院長さんに、〝このごろは満員で満員でしょうがないでしようね〟っていったら、〝いやとんでもない、このごろは入ってくる人が定員の半分ぐらいです〟少年院でも減っているんだそうです。一番さかんだ

った時から比べると半分にもなっていない。ということなんです。どうしてだろうって驚いたら、それにはいろいろな理由があるけれども、その一つの大きな理由として、みんなが不良化の方向へだいぶ進歩したために、よっぽどひどいのでなければつかまえてこないことになったんだというんですね。たしかにそういわれればそうですね。われわれが中学生なんかを見ても、昔だったら不良だと思うのが、今はごく普通ですからね。だから、そうするっていうとこっちの頭がおかしくなっているのかなと自ら疑いますけどね。たしかに子どもたちが、全体として無気力でくだらない刺激を求めて興奮したがるという傾向になっているんだと思います。こんなやつばっかりいっぱいでてきたら、もうわれわれ明治人は、いたたまれませんが、おそらく若い人たち同志だって、そんなのはあまりいいと思わないんじゃないかと思います。ところが、不思議なことに、その時のテレビで、そういうことをやらない若い人がほかに大勢来ていて、その人たちに司会者が〝自分がおもしろいからやるんだっていうようなの、それでいいと思うでしょうか〟って聞いたら、そんな馬鹿なことなんてといったのは一人ぐらいしかいなかったですね。あとはだいたいみんな、そうとうな程度に夜中のかみなり族に共感しているんです。これはもう本当に恐るべきことだと思いました。

情性・意志の欠乏―その原因

なぜそういう傾向がだんだん強くなってきたんだろうと思うと、これは当たっているかどうかわかりませんけれど、私はどうも、小さい時から何でも与えすぎているんじゃないのかなと思うんです。私は自分の子どもについてはどうだったか忘れてしまいましたが、孫がいっぱいおりまして、それが年がら年中出たり入ったりしますから、孫はよく観察しているわけです。そうすると、何でもよく親が気が付いて、食べる物でも、遊ぶ物でも、まだほしいっていわないのに食べさせるんです。にんじんを食わないというと、〝食べないと大きくなれませんよ〟なんてよけいなことといって、変な物でこすってみたり、いろんなことして、それを無理に食べさせようとする。おもちゃなんかでも、まだ目が見えないのに、こんな大きな風鈴みたいな物、ぐるぐる回るのね、それも一つじゃない、二つも三つも方々からもらったのをぶらさげます。何でも自分がほしいと思わない先にみんな与えられてしまうんですね。子どもは本当にかわいそうだと思います。食べたくないのに、これ食べなけりゃ栄養失調になるだの、大きくなりませんよだのっていわれて、むりやりに食わせられる。ああいうことっていうのは大変な間違い

だと私は思うんです。子どもは、ほしくなって、それを自分でとっていく、ほしいものを選択して自分がとっていくという、そういう意欲が、そんな時から失うようにされてたんじゃ、かなわないなあと思います。

もっとひどいのは学校です。ー幼稚園は私は本当に知りませんけどー　小学校に入るっていうと大変なものですね。何も、知りたいとも、覚えたいとも思わないことを、むやみやたらに、しかも驚くほどの量をつぎこまなけりゃならない。消化できませんよ。上の学校ではなおさらです。現在中学だの高校なんかの、あの教科書ですが、ーみなさんはこの間やったばかりの方が多いらしいけども、それをふり返って見てごらんなさい。とにかく、大変な量ですよ。だから、興味をもって消化しようなんて、そんな意欲を起こしている暇がないですね。いやだっていっても、無理やりにこうやって、ちょうどベルトコンベヤーっていうんですか、あれにご馳走がいっぱい並べてあるんです。それがずーっと来る、それをパッパカ、パッパカ、パッパカこう食べなきゃならない、どんどん、どんどん。それで時々、からだをドンドンゆすってはまた、食べなきゃならない。そんなふうに今の仕組はなってます。

少し余計な話になりますけれど、ここんとこちょっといわないでいられないからいいますけどね。人間、そんなに知識をたくさんもって、いったい何になるんだろう。食べ物ならたくさんあったらつくだ煮にしてあとで何かするということもあるけれども、知識なんていうと、本当はいったい何になるんだろうなあ……。あんまり知識が進んで、根性が悪いと原爆や水爆を作るようなことに利用してしまうということになります。

とにかく私は、学校で詰めこんでいるのは消化不良を起こすがらくた知識だと思います。家に帰れば使い切れないほどの物を与えられるし、知識だってね、うんざりするほど、本当にもうへどはくほどいっぱい詰めこまなきゃならなくなってる。それでいったい、意欲っていうか、やる気を起こす欲望が発展してくるだろうか。私は、人間らしい積極的な働きをしようという意欲が失われてくるのは、要するに与えすぎだとか、教えすぎだとかいうようなことだと思うんです。子どもたちの食べ物や、遊ぶ道具については、私はあんまりよくわからないんですけれども、せめて学校で教えることね、あれは半分にしてもらいたいなあ。そしていろいろチェックしてみると、よっぽどおまけしても、四割ぐらいへらしても決して知能の程度というか、発達ということには、さしつかえないどころか、その方がはるかに有利であるということは、もう間違いないと思うんです。今度の文部大臣は、教科内容の量を減らすといっておられますね。あれは大賛成ですが、どんな考えでどんなふうに減らすのか、

これは本当に刮目(かつもく)していい所だと思います。とにかく今のような、何でも与えられすぎるというのは、すみやかに改められなければなりません。

疑問をもたない子ども

だいたい、知識を与えられすぎた子どもたちは、疑問を起こさないですね。今、私のところに娘がお産で帰って来ています。その娘に一歳と十カ月くらいの子どもがいますが、その子はけさも出てくる時に、やかんをふって、「なに？　なに？　なに？」っていうんです。「やかん」といってやると、「あがん」なんていって、またすぐにこっちの方を見て「なに？　なに？」っていいます。そういうふうにいろんな疑問を起こすんです。それを見ていて、いいなあ、大いに疑問をもつようになってくれればいいなあと期待してます。

ところが、もう中学生くらいになると、まったく驚くようなことがあります。私は、英語を教えるんです。中学一年生が入ってくると、何も教えないで「はい、いいかい、私が言う通りに真似するんだよ」っていってね。たとえば「アイ　アム　ア　ボーイ」とこう言うんです。「アイ　アム　ア　ボーイ、はい、みんな言ってごらん」「アイ　アム　ア　ボーイ」そしたらまた「アイ　アム　ア　ボーイ」ってみんな言うんです。何回でも言うんです。これが不思議ですね。われわれが中学の時だったらそんなことはありませんよ。おや？　どうして何度も何度も同じこと言わせるのかなっていう疑問を起こしましたね。ところが今の子は、素直なんですかね、そういう点は。二十人いても、三十人いても、その中に疑問を起こす神経もっている子がないんです。相手からこうされたら「は」「は」、それに反応するだけ。ポンと来たら、ポンとはね返す。そういう反応をしているだけなんでね。何も自分の方から「アレ？　これは何かな」そんなこと思わないらしいんです。

で、私は小田原ですから、気候のいい小田原の子だけなのかなあ、と思っていたら、そうじゃないんですね。夏休みになりますと、丹沢の山の中の一心寮で小学生の合宿をやります。そこへは大阪からも来る、名古屋からも来る、東北の方からも来る。その方々から集まった子たちがやっぱり同じ反応です。だからこれは全国的な現象だなと思っているわけです。

さっきの一年生の英語の話ですが、私はどう思っているかというと、アイ　アム　ア　ボーイを十回いわされれば、大抵の子はうまく言えるようになってしまう。そしたら、〝これいったい何だろう〟〝先生、これ何ていうことですか〟とか、なぜこんなこと言うのかとか、何とか言ってくれそうなもんだと思って、こっちは一生懸命すきを見せているのです。それだのに

ちっともエイッとこう斬りこんで来ないんですね。あんまりひっかかってこなくてしょうがないから、これは何ていうことだと思うかってきいたら、まだボーッとしている。これは〝私は少年である〟ということだ、そしたら、ああそうか、と思っているだけなんです。どれが〝私は〟で、どれが〝少年〟で、どれが〝である〟なのか、そんなことも思わないらしいんです。それでしょうがないから、いろんなことをだんだんに言って、結局みんな教えてしまいます。そうすると今度は、〝あなたは〟っていうのは何て言うんだろうって疑問を起こしてくれそうなものなのに、絶対起こしませんね。そういうふうに意欲がない。このように意欲がなくなってしまったということは大変なことです。国家、人類にとってというほど大きな視野でなく、一人一人の子どもの将来を考えても本当にかわいそうなことだと思います。ですから、なんとかして疑問を起こす神経を刺激してやりたいとしょっちゅう思っているわけです。

落ちつかない子ども

それから、このごろ大変目立つのは、ひどく落ちつきがわるい子です。ふわふわふわふわ、こういうふうなかっこうでやって来るんです。「先生どこ勉強するの」っていうんです。「何いっているんだ、そこにちゃんとすわってやらなきゃ、だめじゃないか」って言ったら、ふっと中腰ぐらいになって、机の上にのしかかってくるんです。そういう極端なのは、それほど多くはないけども、しかし最近驚くほどふえています。

親が、「おたくの塾に入れてもらいたい」といって子どもを連れて来る。すると、親が一生懸命話している間に、子どもはバタバタあばれて、そこら中立って歩いて、本をひっぱり出してポンとほっといて、また次の本をひっぱり出す。一分もじっとしていない。そういう子が案外たくさんいます。私の所は、別に専門でも商売でもないのに時々遠くの方からそんなのを連れて来たりする。そんなの、手のつけようがないので困ってしまいます。だけど仕方がないからよくよく親を観察してみます。子どもをいくら観察してもよくわからないものですからね。

親を観察しますと、大抵不思議なことに、みんな実に賢い、えらそうなお母さんです、勝気なんでしょうね。現在私のところに来ているうちの一人なんか、おばあちゃん子らしくて、来る時はいつもおばあちゃんが連れて来る。これは小学校の四年生です。そのおばあちゃんなんかはちょっと立派なインテリばあちゃんです。「この子の教育はわたしがするんだ」という意気込みが表に現われています。ところが、孫にあたるその子どもは、ふわふわふわふわとして、おさえようがないのです。頭は悪くないのに尻がいうことをきかないのです。

また、この間遠くの方から来た人があります。夫婦でやって来ました。お父さんはわりに無口だけども、座禅かなんかやってなかなか自信ありげな人です。お母さんはすごく賢そうな人で、何ていってもみんな知っているんです。私など口を出す所がない。教育から心理学に至るまで何でも実によく心得ている。しかし、その賢さや知識ではどうにもならないとみえて、子どもは手に負えないほどそわそわしているんです。こうしてみると、自分の知識や見解に自信をもちすぎている人の子が落ちつきがなくなるもののようです。

そこでもう一つ、これは自分の経験なんです。うちの一番上の娘には子どもが三人いるんですが、その一番上の子が幼稚園で、みんなが折紙なんか一生懸命やっているのに、その子だけはキョロキョロ、キョロキョロして、人のを見たり、先生の頭を見たりして、自分のやることを一生懸命やらないんです。まあこれは困ったことだなと思っているうちに、小学校に入りました。娘が学校へ行って、学校の先生に聞いてみると「どうもお宅のお子さんは、キョロキョロ、キョロキョロして」と言われて、もういよいよこれは大変なことになってしまったというわけで、思案にくれて、日ごろあんまり信用していない私のところへ相談に来ました。そして「うちの子はこうで、学校へ行ってこう言われたんです。どうしたんでしょうね」と言うんです。

真正面を向いた教育

ところが私は、前から感じていることがあるんです。どういうことかというと、その一番上の娘というのは、まあどっちかというとインテリ型でしっかりしているんです。小学校の先生なんかやったりして、いろんなことよく知ってましてね。すべて教育的な配慮をもって子どもに接しているつもりなんです。しかし私は、いつでもあれでは子どもがかわいそうだと思っていたので、言ってやりました。「あなたはね、子どもを本当にちゃんと、まともに見てやってないじゃないか。子どもを見ていないんだ」。そういったら、「そんなことないわよ」ってものすごく怒りました。自分は子どもを、こんなに一生懸命見てる、一生懸命考えているんだと言うんです。ところが私が見ていると、どうもそう思えないんです。たとえば、ひどく忙しい時に「ママ、ママ」って言われる。その時に、「今、忙しいから、あとでね」とか、「ああ、そうオ」とかって、一秒の何分の一かですよ、心を真正面に向けてやれば満足するんだろうと思うのに、なかなか返事しないで、しまいに「うるさいわね」とか「まってなさいよ」とか「ひとが忙しいのがわからないの」などと言います。これじゃ、何かみたされないものが年中気持ちの

中に残るんだろうなあ、かわいそうだなあ、とこっちは思っていたんです。

そういうのは、子どもに真正面に向かって、子どもをじかに見ていないのです。何で見ているかっていうと、知識ですね。子どもというものはこうである、こうしなくちゃいけないとか、ああでないとか、子どものこういう時はこういう理由だとか、本に書いてあるような理くつを知っているわけです。で、子どもを見る時に、子どもそのものを見てないで、自分のそういう知識のあみみたいな物を通して見ているんです。だからむこうからぶつかって来た時に、あみにぶつかってしまうんです。からだにじかにポーンとぶつかって来ないんです。だから、その子は年中物足りないものを感じているのですね。子どもが三人いて一番上なんです。だからますますそういうふうな扱い方をひどく受けるわけです。一番お兄ちゃんなのに、なんていってね。そういう気持ちもあるんだろうと思います。

教育的な見地から編まれた知識のあみに、どんとぶつかるような、それに反応させるような扱い方をしょっ中している。だから私がそういったら、初めは怒ったけれど、しばらくたって考えてみると、どうもやっぱりそうらしいって気がついて、できるだけ正面に向って、むこうからドンときたら理くつでもって軽くとめないで、全面的にはっとうけとってやる、そういうふうな気持ちになった時、子どもは見る見るうちに変わってきました。こんなことを言うとすぐに、甘やかすことになるだろうなんて言うんですけど、生意気なこと言うもんじゃありませんよ。甘やかすことを心配するより、とにかく全面的に受けとってやるというのがまず第一、本当に真正面に向いてやれば、子どもの本当の姿が見えるから、甘やかすことはできません。それだけの知恵はどんなお母さんにもそなわっているはずです。

はぐらかされたり、そらされるのはいやなものですね。おとなどうしだって、斜にむいているような物の言い方されると、実に愉快じゃないです。どんな馬鹿らしいことでも真正面に向いて「きょうはいいお天気ですね」っていったら「そうですね」って言やいいのに、横向いて「ああ、そうですね」なんてそらされたらなんとなく気分が悪いですよ。「雨が降って困りますね」って言った時「やあ、雨が降らなきゃ困るとこもありますよ」、こういわれても真正面に向いて言われれば、まあ割に気持ちがいいです。一応自分が認められていると思うからでしょうね。なんにもまともに受けとめられなかったら、その方がもっと気持ちが悪いです。

知識と物

ともかく子どもに対して真正面に向かって物を言うっていう

ことが欠けているような気がするんです、みんながね。お母さんたちも、おそらく幼稚園の先生や学校の先生なんかもね。どうもそういう人が多いんじゃないかと、私は思うんです。本当に知識なんてものは、そりゃたくさんあったっていいですよ。しかし、生の知識じゃ、こりゃだめなんです。生の知識をいっぱいこうつなぎ合わせて、自分の考えじゃないですよ。たくさんある知識をよーく消化して、それから自分の物として出すんならいいけども、知識を知識のまんまで応用してみるってことになると、子どもをよく見るんじゃなくて、理くつの方へ、子どをあてはめてみようというふうになるから、子どもが本当は何を求めているのかわからなくなってしまう。そういうことがすごく多いような気がするんです。このごろ若いお母さんたちにそういう傾向が強いということが、世の中全体の子どもたちの落ちつきがなくなってきている原因じゃないのかという気がするんです。

それからも一つ、ちょっと似たようなことですけども、このごろ、中学生ぐらいになると、物を買いたくて買いたくてしょうがない子があるんですね。これはどういうことかというと、それによっていくらかの生きがいを見いだすわけなんです。だから何か買ってもらうと、すぐに、次は何を買ってもらおうかなあ、買ってもらう物ないかなあ、というふうに神経を働かせるわけです。物を使いたくて買うのではなく、買うということに関心があるわけです。これは案外多いですよ。

急に勉強ができなくなった中学生がいるんです。それと同時に物をどんどん買いたがって、次から次へと物を買うようになる。一体どういうのかと思って、よくよく観察してみると、原因結果が反対なんです。その家は食えないわけじゃないのにお母さんがどこかへ働きに行くんです。それでお金を儲けてくる、儲けてくるからお金がもらえる、そうすると何か買う。親の身になってみれば、物を与えて満足させてやろうと思うわけでしょう。ところが子どもは中学生くらいになったって、三万円の自転車を買ってもらうよりか、家へ帰った時にお母さんがいてくれた方が、どのくらい気持ちの底の方で安定するかわからないわけです。それだのに、親は子どもに何かすごく高い物を、たくさん与えることによって、その子を満足させていると思っているのです。お母さんらしい暖かい心とつめたい物とをひきかえにして、それでうまくいってるというふうに思っているんです。そういう子っていうのは、心が不安定で勉強のような積み上げていかなければならないことに対する意欲が、本当になくなってくるんです。物と心と、どっちの方が本当に満足させられるんだろうというようなことを、もう一度考えてくれればいいなあと思う場合が実にたくさんあります。

自分の知識で子どもを育ててやろうというのと、物でもって、うまく育ててやろうと思うのと、これ意外に似ているんです。知識と物質とがね、非常に似ていると思うのはどういう点かというと、両方ともある形が決ってしまったもので、そういう形が決ってしまった物からは新しい物を生み出してくることはできないわけです。そういう、ある形が決まってしまっているという点で、物と知識とは似ているような感じがするんです。

感動するということ

われわれが集団生活をし、いい社会をつくっていくために必要な情性。人間同志、お互い同志の思いやりがわいてくる精神的基盤。そしてまた、物事をじっくり味わうという態度を生む安定した心。いったいどうやってそれが育てられるんだろうかと、私はいつも考えないでいられません。説明だとか、お説教だとかいうものは、知的な理解は助けるかもしれないけれども、感動がありませんね。

私は小さい時、このすぐ近くで育ったんです。ここがたぶん、陸軍の火薬庫のあとじゃないかと思うんですが、この火薬庫のすぐ裏にいたんです。母とは早く死に別れましたが、この裏に住んでいるころには母がおりました。庭が広かった。私の母は畑が大好きだったんですね。百姓じゃないんですけど。ここの前身のお茶の水女子高等師範の卒業生でね。その時分じゃ才媛だったんでしょう。だけども、畑を作るのが好きで、春になるとはだしになって、庭の一部を耕して、そこへなすやきゅうりや、いろんな苗を植えたり、インゲン作ったりしたんです。

ある年、私がいくつぐらいか、おそらく三つか四つくらいじゃないかと思うんですが、朝起きると一番先に、母は畑を見に行く。私もくっついて出て行ったらしいんですね。ある朝、台所から裏へ出る、すると小さななす畑があって、なすが七、八本か十本ぐらいあったろうと思います。そこへ行って立って見ていると、母がね「まあ、なすの花が咲いた」って言ったんですね。澄んだ感激の声だったのです。私はその時、母のたもとにつかまりながらそれ見てね、「ほんとだ」と思ったんです。皆さんご存知でしょう、紫の黒いピカピカ光るような、なすの茎の所にね、葉っぱがこう出て、そこにうす紫の五角形の花がぱっと咲いて、真中に黄色いきれいな芯、あざやかなもんですね。それを見て母が「まあ、なすの花が咲いた」っていうのを聞いて、私は初めて本当だ、と思ったのです。ああ、本当だなと思った、ということなんです。それが、私が自然というものを見る目を開かされた事情なんです。その時に私は、母が何を感じているかってことが、自分にはっきりわかる感じがしたんです。もしあの時、母が情操教育としてやろうと思って、「ほ

ら、見てごらんなさい、なすの花はね、きれいでしょ、形もいいし、色のとり合わせもね、真中に黄色があってきれいでしょ」って説明したとしたら、私は「うんうん」て言ったきりで何も感じなかっただろうと思うんです。説明だとか、お説教っていうものは、みんなそういう類のことであって、本当に感動を伝えることはできないものだと思います。

私は、それがきっかけで、その目で他の物を見ると、みんなもう、美しいと言葉では言えないんです。美しいとか、きれいだとかっていう言葉じゃないんですけど、何とも言えない喜びを感じるようになりました。たとえば、雨だれの下に小さな砂利みたいなのがいっぱい、きれいに洗われてますね。それをようくみると、黒いものもある、白いものもある、赤いのもある。小さなものですけど、そういうものを見ても驚くようになった。なにしろ、私はこの自然というものに驚きを感じる、そういう神経をその時に与えられたような気がする。この情の世界っていうものは、私は理くつやへちまじゃないんだと思うんです。知の世界っていうものは、合理的な世界ですけれども、情っていうものは、超合理的な何かだと思うんです。理くつなんかいってみても感動しない。私はだから、今でもそう思うんです。

あの山の中に、神奈川県の山北っていう、この間豪雨のあったすぐそばですけど、そこにうちの合宿所があります。そこへ時々塾の子どもたちを連れて行きます。そして、何も説明はしませんけど、一週間も一緒に生活してると、やっぱり自然というものに対して、何かしらの感覚をもってくれる子がボツボツでてくるんです。東京なんかから来た子がああいう所にくると、変わっているからすごいなあーと思って、自然を感ずるかと思うと、案外そうでもないですね。やっぱり何日間かそこにいると、初めてこんなだったのかって、その美しさとか、安定した力強さだとかがわかってくるようです。

きのうなんか行って見ると、山ユリがいっぱい咲いてます。そこを歩くと、ワーッと谷の底からユリの匂いがふき上がってきます。そこにねむの花が咲いてますしね。ねむの花ってのは、ふわっとした、とってもあったかい感じのする花です。それから道端には、たくさんピンクのなでしこが咲いています。その中にまた、こまつなぎだとか、うつぼ草だとか、いろんな色の花がいっぱい咲いてる。

それを見て子どもは「きれいだな」ってだいたいそういうんですね。「お、咲いているなあ、きれいだな」ってこのくらい。「あ、ユリがある、すごいな」っていう、そのぐらい。ところが、何日間かいると、そんな「お、きれいだな」なんて浅はかなこと言わなくなって、本当にしみじみと、ああいいなあっていう、そういう気持ちが起こってくる。これは、私がそう

いうことを教えるとか、何とかいうことじゃないんです。説明するわけじゃなくて、何となくお互い同志が感じ合っていくということですね。そういう世界が、情の世界だと思うんです。

真心

われわれは、人と、本当にこのようにお互い同志が感動し合って生きていきたいなあと思います。それには、物に対しても、自然の物でも何にでも、真正面に向かえるようにならなければならない、そうでなければ、本当の味なんてものは出てこないと思うんです。この、真正面に向かうってことはね、口で言うのはやさしいけど、なかなか本当は、われわれ凡人にはできにくいことなんです。その真正面に向かうってことは、いろんな他の言葉で言いかえることができますね。真心で接するとか、真心をつくすということもできると思う。真正面っていうのは、斜に構えたり、そっくり返ったり、前かがみになったり、逃げ腰になって人に接するのではなくて、正しい姿勢で相手に向かう。つまり、真心でもって向かっていくということです。そして、本当にその真心で　向かった時、お互い同志、感動が移りうるんですが……。

われわれね、人間同志の間で、親子の間でも、先生と生徒の間でも、まともに向かって、まともにものを言う、まともに受けとってやる。情の世界を育てていくには、それしかないんだろうという気がするんです。

言葉、真心のこもった言葉です。たとえば、二、三日前に小さな子どもが、畑をつっついていたら、大きなみみずが土の中からにゅーと出てきたんです。そうすると、その小さな子どもがね、「ミミズが出てきた。ワァー、ミミズが出てきた」っていって、もう感激してるわけです。恐れてるんだか、喜んでるんだか、わからないけど、とにかく感激してるんです。でもそのお母さんがね「そうお、あ、そうお」っていってね、見てやればいいのに「それはミミズよ」って言ったら、こんなつまらない話はなくなっちゃいますね。やっぱり「あ、そうお、どうしたの」「とんとたたいたら、出てきたの」「そお」なんて言ってね。別に何も説明することはない、そうするとそこに、何とも言えない、何かこう、ミミズとお母さんと自分との間に、何かやわらかいものが漂ってきますね。そういうことが、われわれ人間の生活の中で、情を育てていくのに、大事なポイントなんじゃないかなってことを、しょっ中感ずるんですけれども。

やっぱり、言葉でといいますけど、本当に真心のこもった言葉で、というけども、そのためにわれわれ自身が、真心を発揮できる、つまりまともに物を見られる人間にならなきゃならないわけです。ところが本当に物をまともに見るということは、

実は容易なことじゃありません。私は宗教のことはあまり知りませんけども、ある座禅なんかやる人、一生懸命なにやってるのか知りませんが、ともかくやってると、きっと知識だとかいろんな余計な物を通さずにね、物そのものがはっきり見えてくるんじゃないのかな、と思うんです。それでなかったらちょっと理くつが合わないことになると思うことが、いろいろあるわけです。私は、ああいう修行はどういうためにやってるのか、それは知らないけども、やってると本当に物が見えてくるんだと思う。物が見えるっていうことは、一つ一つの物が正しく見えるっていうこともありますけど、それよりか、物と物との関係が、非常に明らかに見えてくるということです。物と物との関係が明らかに見えるということは、たとえば自分のもっている知識、何億というたくさんの知識、その知識との間のかかわり合いのようすが非常にはっきりしてくるということです。そうすれば知識の意味の組み合わせをうまくやって、いわゆる創造的なはたらきがでてくるんだろうと思うんです。そして、知識もむだなものじゃなくなります。

物がちゃーんと見えるってことは、簡単にいうけども、本当はなかなか見えてないもんです。これは、見えてきて初めて、自分は今まで見えてなかったということがわかるのですね。私なんか、もう六十五歳になって、このごろだんだんよくものごとのようすが見えてきました。この目の方は老眼でよく見えなくなってきましたけど、別の目の方はだんだん、見えるようになってくる。そうすると、ああ今まではずいぶん見えなかったなあって、そういう感じがするんですけどね。もちろん私が、お釈迦さまだとか、キリストみたいにね、そんな立派な目を持っているってことではないんですが……。

私のところの塾を出た人たちで、学校の先生になっている人が多いんですが、そういう連中がやって来ては、三十五歳か四十歳くらいになるとたいてい嘆いてますね。〝教育ってものはできませんね。もう、もう本当に絶望です〟なんて言います。十年くらい先生をやると絶望する人が多いですね。十年くらいやると、ようやっとのことでわかってくるんです。それまでは自分で、なんとか少しうまい具合にやって、教育ができるかなんて思ってるんです。というのは、教育の根本は知識を与えるとか何とかということ以外に、もっとその以前に、人間の根本的な成長という課題があるということに、本当には気がつかないからです。ところが、十年もやって、それに気づいてくると、自分自身の足りなさを感じてくる。この足りない自分じゃとても人の子を指導するとか教えるとかはできない、ということを非常に強く感じてくる訳です。しかしこれは、人間というものへの反省が深まったということで、一面、少しものが見え、

子どもが見えてきたということでしょうね。ですから、その時こそ一生懸命真心をつくそうという工夫をしていくことが心要だと思います。

私はこれで、四十年間ね、こういう寺子屋をやってきましたが、ずーっと四十年間、絶望のしっぱなしです。もう、本当に自分は教育をやろうなんていうこと考えたのが、そもそも敗因だなあと思うんです。思いながら、それでもやめられないでこうやってきてる。どうしてやってこられたのかと思うと、やっぱり、自分の力っていうようなことじゃなく、いろいろな教えだとか、先輩や、いろいろな人たちの、本気になってはいた言葉が力になっているのです。自分じゃ、一生懸命真心をこめた言葉をはっしようと思っていても、何かこうそこに知識のかけらみたいなものがくっついていたり、本当にこの自分の心をはだかにして、それをぶっつけていくっていうふうな、それだけの、あるいはまた、相手を見てそのまま、ありのままに見届けていくという力が、自分にはないということを、嘆きながらやっていく、それが切実だと思うんですけども。

真心から生まれる言葉

情という世界を豊かにしていく。よく言われる、情緒とか、あるいは感情、高級な感情とか、そういうものを養っていくのには、音楽とか美術とか、いうものが非常に大事だとされますけど、私は欲望についての自分の考えている体系からすると、それとちょっと違うのが、言葉によって養われる情性だと思うんです。人格ってものは、そういうものを全部ひっくるめた姿として考らえられるんだろうと思います。その中で人間同志が、お互い同志が、本当に暖かい人間愛といったようなものが養われるのは、主として言葉によるのだと思うんです。人間が真心からはいた言葉というものは、よーくそれをくり返してみると何か共感するものが出てくる。洗練された人たちの感動したものを、それを言葉にした物を受けとっていくのが、この情性というものを養っていく、一つの大きな道なんじゃないかと思うんです。

むろん、情性を養うっていうのは、生活の中で、家庭の中で、あるいは先生と生徒という直接接触する集団の中で養われていくっていうことが、一番大事なことでしょうけど……。つまり、お互いに、まともに向かい合ってものを言い合い、生活するということが一番大事なんですけども、われわれ非常に至らない人間でありますので、その至らなさを何かによって補なわなければなりません。それには、真心をこめ、情をこめたうたとか詩とかいうものが、大いに役立つと思います。このことは誰でも、自分の体験によってうなずかれると思います。美しい詩、

本当にいい詩というものは、何かこう響きみたいなものがありますね。それに子どもたちも共感していくことが非常に多いと思います。そういうようなことによって、いい感情に敏感な、豊かな情性が養われていくことになるのだと思います。感情といっても、くやしいとかにくらしいとか悲しいとかっていう暗い面の感情と、うれしいとか感謝とかいう明るい方の感情とがある。そういう明るい方の感情が敏感になってくることによって、もちろん欲望にも影響を与えます。エゴイスティックな欲望、つまり食欲とか性欲とか、またそれを確保するための財欲や支配欲などへの執着が弱まり、お互いがもっと暖かく生きていこうじゃないかという、そういう方面の欲求がするどくなります。そしてそれが養われていくことによって、積極的に明るい、いいことをやりましょうという方向にわれわれの気持ち全体が向かっていくもんだと思うわけです。

大変まとまりのない話で恐縮ですが、ただ、理くつや説明だとかお説教なんていうものでは、子どもにやる気を起こさせることはできない。やっぱり本当に、心を、お互い同志まともに向かって開きあった時にこそ、いい成長をするものだということを、お話してみたかったわけです。大変どうもまずいお話で申し訳ありませんでした。

（小田原市はじめ塾）

シンポジウムのおしらせ

新学年を前にして「幼児教育の原点をたずねて」のシンポジウムを昨年同様、つぎのように計画いたしました。お互いに自らを新たにする努力を積み重ねたいと存じます。

日時　昭和四十八年三月二十四日（土）

講師　周郷　博先生　お茶の水女子大学教授、附属幼稚園長
　　遠藤悟朗先生　東京上野動物園、子ども動物園長
　　藤永　保先生　お茶の水女子大学教授
　　蕪木寿江先生　横浜市市ケ尾幼稚園々長

司会　本田和子先生　お茶の水女子大学助教授

参加ご希望の方は葉書で、東京都文京区大塚二―一―一、お茶の水女子大学附属幼稚園内みどり会研究部宛お申込み下さい。お返事はさしあげませんが、会費金五百円は当日受付へお出し願います。